

しく侍れば、こゝろなき草木の葉さへ露さへ、所がらさぞとおもほしぬ。あはれ花をこひ、紅葉をたづね給はん行ずりの袖に物してなど、あつらへつけ侍りしを、なまけし心の水のながれ絶えざりけん、此ほど高雄の山の紅葉見にまうでおはして、散りにしもあだになさじ、かつは家づとにせさせ、かつはやつがれがことの葉をかれしとて、詠めし山の秋の色をつゝみて歸りぬとて、散りし葉の其色さへもなど、紅葉より紅なる歌かいつけて給ふこそ、又なきみやびなんめれ。されば霜にやつるゝ草の枕も、いつしか錦の色をそへ、たるひにとちし松の戸も、菊より後の花咲し心地して、めでおもほすこゝろの外にうごきて、いひ出るこそ、我ながらかたはらいたきわざなるべし。

もみち葉もあだにや苔に朽なまし君が心の色なかりせば吹風のたよりにつけし紅葉葉の色さへ深き山路しられて紫のおふてふ野邊も中々にみやこの紅葉うばふいろなき夢にもと高雄の山の紅葉ばをたびの衣にかさねてぞぬる音にきく心さへしも清瀧の河瀬うちわたす詠めしられて

一、比日詠吟落葉

峰にさへ風の氣色も絶えしかど哀れ木の葉のもろき頃哉

初戀

あはれとも見ずやしらすやあり明の曉ばかりぬれし袂をわがせこも又いつかはといひあへて別れし秋の袖の月影

別戀

一、山本基庸の返歌につけて

基庸の許先日の返歌落手。

入木の道たづねたまひける人に遣しける。

水ぐきの跡ししのばゝ越の海の深き心をつくしてぞしれ基庸のがり入木道の事申侍けるに、『水ぐきの跡し忍ばゞ越の海の深き心をつくしでそしれ』と返歌かいつけてたうべける又の返し。

とりの跡しのぶ心のかひあらば越のみづ海くみも盡さめ

一、竹隱へ返書に

七日。快晴に付竹隱の許より、歩行の事相叶候はゞ可然候。げにも老杜が日月籠中鳥の身と感吟の由消息あり。依之返書に書付く。

よしやよし飼おく鳥を哀れとも斯る折にや思ひしらまし

一、夢中に句を得

九日。曉夢中得左の一句

名は外山に鹿もなし

十日。昨曉夢得の句に脇句等つらね侍る如左。

月にたぐひてつもるしら雪

舟さして人もや友をしたふらん

芝邊に田鶴の鳴きわたるなり

はるかなる流の末の暮初て

うちけぶりたる里の村々

しばしさへ晴間も見えぬ五月雨に

遠しと旅の道いそぐらし

一、偶成一首

うつりきて嵐に更る冬の夜は月さへ人のいとひがほなる

一、歌學につき問答

基庸在京の内書問如左申遣候處に、基庸加筆にて申越候。

加筆の分今書せしめ

追啓。左の歌天象多く且薄霧の空耳にかゝる様に候。此條

如何。若し苦かる間敷候や、基時卿被窺御意被仰聞度候。

天津雁おとづれそめてゆく雲のころも手さむみ薄霧の空

右の趣一々承、了解仕度候事御座候。宜く御吟味頼入申候。

又

かへるさを待とし知らばしら川の關もる月も心とどむな

此歌白川のあたりへまかりける人を、送り候とてつかうま

つり候。關もる月にと候へば、はきと聞ゆる様に候得共、

猶もの字可然様にも被存候。西行の『白川の關屋を月のもる

影は人の心をとむる也けり』と被詠候心をもしたひ候て、

月へかけ候てことばり候はんか、是又うかゞひ申度候。

(朱書) 此歌は月も可然被思吾候。をと有之候は隨に聞え候て、いやく可有之候。とかくおぼつかなくて、聞えたる風雅よく御座候。體文のごとく、埒明申候ても、さまよからは比興の事と、いつつも法皇御

日野殿薨去被成候以後は、何方へ合点を可奉願たよりもなく、空敷木の下に朽ることの葉計りに候。就夫今合点は有栖川様・近衛様・清水谷殿の由。攝家・宮方はいかゞに候。